



Title	芥川龍之介「手巾」の原話
Author(s)	岩井, 茂樹
Citation	日本語・日本文化. 2025, 52, p. 128-111
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100662
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈研究ノート〉

芥川龍之介「手巾」の原話

岩井茂樹

はじめに

芥川龍之介は近代日本を代表する作家の一人である。その人気はいまだ衰えることを知らない。彼は師の夏目漱石のような長編は書かなかった。短編小説だけしか遺していない。いくつかの作品は、何らかの原話を基に創作されたものとされている。彼の代表作「蜘蛛の糸」や「羅生門」がその実例である。ただ、小説「手巾」については、その話が芥川の創作なのか、あるいは何か原話のようなものがあるのか、よくわかっていなかった。

本稿ではその原話と見られる新渡戸稲造の言説（挿話と談話）を二つ紹介し、それと芥川の「手巾」との比較を行なう。

なお、「手巾」の引用に際しては、すべて『芥川龍之介全集』巻第一（岩波書店、一九九五年）から行ったこと（以下『全集』とする）、また他の書物も含め引用に際しては、読みやすさを考慮し、旧漢字を常用漢字に改めた他、ルビは最小限にとどめた。また二字以上の繰り返し記号については、それに該当する文字を当てたことを最初に断っておく。

一 小説「手巾」の概要

「手巾」は一九一六年（大正五）一〇月一日発行の『中央公論』誌に掲載された作品である。後に行く比較のため、その梗概を『芥川龍之介全作品事典』から引用しておく。

東京帝国法科大学教授、長谷部謹造先生は、東西文化の相互理解を進める橋梁にならんと志している。また、近代日本の精神的墮落を救済するのが望みである。その助けとなるのは、日本の武士道だと、先生は考えている。ある日先生は、教え子の母、西山篤子の訪問を受ける。婦人は、かねてから入院していた息子の死を報告に來たのだった。先生は、婦人の微笑さえ浮かべる平静な態度に不審を感じる。だが、ふとテーブルの下に、手巾を握りしめながらふるえる婦人の手を見つけ、感情の激動を抑えていることに気づいた。この婦人の態度は、先生の信奉する武士道にかなうものでもあるように思えた。先生は倫理的な満足を抱くが、読みかけのストリンデベルグの作劇術ドラマトウルギーの中に、気になる一節を見つける。顔は微笑しながら手巾を裂く二重の縁起は臭味メツツヘンというべきもので、俳優の常套手段マニール型のひとつだというのである。先生の心の調和は乱れずにはいられない。(二)

ここで主人公とされる長谷川謹造は、芥川自身の証言もあって、新渡戸稲造をモデルとした人物とされており、これはもはや定説化している。辞書にもあるように、主にこの作品は「文明批評」と「新渡戸稲造と武士道」という観点から論じられてきた(一)。その他、近年では作品に登場する「岐阜提灯」や「朝鮮団扇」、さらには「手巾」などの記号的意味から読み解こうとするものや(二)、「型」「臭味」などに注目した論(三)が展開されているのが現状である。ただし、その原話については、まだ確たるものが発見されているわけではない。

二 久米正雄の証言

この小説は久米正雄によると、久米がその素材を与えたものだという。それを見てみよう。

『芋粥』を『新小説』に載せ、次で『中央公論』から何かかいてくれるやうにと頼まれたので、書いてやったのが『手巾』です。この『手巾』といふのは、一宮にゐて書いたものですが、元々、あの材料は僕のものだったのです。新渡戸さんのことを書いたもので、一宮で雑談してゐるうちに、僕がかう云ふものを書かうと思つてゐるといつたら、「僕にそれをくれないか。中央公論から頼まれて来てゐるんだ」といふ訳で僕が話してやつたものです。（五）

というものだ。これによつて、この久米が一宮にいた時に芥川に話したものが、小説「手巾」の基になっており、またそれは新渡戸稲造のことを書いたものであることがわかる。

ただし、先述したように、この久米の話がどこから来たものかは、未だ不明である。筆者はこの度、この原話になつたと思われる新渡戸の話を新しく一点発見することができたので、それを後に紹介する。

三 『世渡りの道』の挿話

新資料を紹介する前に、まずは新渡戸の著書『世渡りの道』に載る逸話からである。こちらはすでに相川直之氏によつて紹介されているもの（六）だが、比較を行なうため再掲しておく。

或日本婦人が外国の婦人を訪ふて其安否を尋ねた時、婦人は久しく無沙汰に打過ぎたことを謝し、其申訳の理由として近頃最愛の子供を失ふたことを述べ、日本風に笑ひながら、この不幸を物語つた。婦人が帰つて間もなく、僕がこの外国婦人を訪ふた。すると、曩さきの外国婦人は折柄傍に來合せて居た同じ外国婦人と、その不幸なる日本婦人の挙動を批判して居た。乙婦人は云ふ「私はどうも合点が行かん。日本の女は真面目も真面目、自分の子供を失ふた如き真面目なる事実を、笑ひながら語るとは合点が行かぬ。一体日本婦人には人情といふものがあるのであうか。どうも薄情の極の様に見へる」と。之を聞いた甲夫人は「あなたは御覧にならなかつたか、彼女の口には笑を含み、言は爽さわやかであつたが、眼には涙が溢こぼれて居るのにお氣がつかなかつたか。手に持った手巾を、頻りに絞つて居たのにもお氣付になりませんでしたか。額に青筋を走らせる様にして、張り裂けんばかりなる悲哀を我慢した、克己の努力にお氣付になりませんでしたか。」といふて乙婦人の説を反駁し、転じて僕に向ひ「日本人の笑は深き研究を要するものではありませんか」といふた。同じ笑でも其の内容に至つては、見る人が見れば斯の如き大なる差異がある。

笑を以て其真情を庚かくさんとすることは、果して永久に出来るものであるか否か。夫は相手によつて大に異なる。併し相手が如何に愚おろかなる者にしても、永く庚かくし遂げるものでない。リンコンの言に「一時僅の人を欺くことは易い。又暫くの間多数を欺くことも出来る。然らざれば長い間僅の人を欺くことも出来る。併し多数の人を長く欺くことは到底不可能である」とある。所謂誤魔化しは永遠的性質を帯びるものではない。人は決して長く自分を庚かくし得るものでない。(七)

この引用部から分かるように、この話の主題は感情を隠し続けることができるかという点にある。その例として日本婦人は登場する。

四 雑誌『ニコニコ』の談話

次に見るのは雑誌『ニコニコ』に載った新渡戸の談話である。こちらは今まで指摘されたことのない資料である。今では中々入手しにくい資料であるので、出来る限り多く、煩を厭わずに引用しよう。

談話のタイトルは「日本人のニコニコ振（中）」である。法学博士・農学博士と紹介されている新渡戸は「私の家であつた妙なニコニコの実例といふのは外でもない」と言つてから、次のように語り出した。

私は北海道の農学校に居た時の事、丁度外国人の客が二三人来て種々話をして居た処へ、一人の日本の婦人が尋ねて来た、之は以前の知合であるが、少時顔を見せなかつたので、其無沙汰を謝するために来たのだ、其婦人がニコニコして其無沙汰した理由を語り出したが、その理由たるやニコニコ処か、非常に悲しむべき事件なのだ、（八）

ここは、おおよそにおいて、『世渡りの道』と同じものだ。先を見てみよう。

何を謂ふかと思ふと、実は小供が病氣に罹りまして、種々手を尽しましたのですけれど、遂それが亡くなりまして、葬式やら法事やら取り込んで居りましたので、是非伺ひしやうしやうと心掛けて居りながら、こんなに御無沙汰をしましたといふのだ、それで顔を見ると依然としてニコニコだ、併し、子供が死んだといふのだから、此方でもそれは大変な事であつた、さぞお力落したことであらうと弔みを述べると、婦人は依然ニコニコしていろいろ手を尽しましたけれど、たうたう、と言葉を切つたが、顔を見ただけでは少しも悲みに堪へないといふ様子がない。サア其処で問題が起つた、其処に居合はした西洋人は、異口同音に、どうしても今のニコニコは解ら

ない、自分の子供が死んだといふ事は、最も悲しむべき事件であるのに、それを語るにニコニコして居るとは一体どういふ心理状態から来るのであらう、どうも吾々欧羅巴人には了解ができないといふ論だが、これには私も鳥渡考へさせられた。(九)

さきほどの記事に比べかなり詳細な描写である。ここから注目すべき箇所である。

すると家内が、アノ手を見たか?といふんだ。さう謂はれて見ると、私も、談話の方へ氣を取られて顔ばかり見て居たので手迄は注意しなかつたが、さすがは女で、其辺迄氣がついたものと見える、家内のいふにはあの手を見れば、今のニコニコが解釈出来るのだ、顔は成程ニコニコしては居たが、両手には非常に力を籠めて、手巾をギョツと握り絞つて居た、あれは日本の婦人のたしなみとして喜怒哀楽を妄りに外に現はさないと云ふ処からでもあらうが、また一方には死んだのは自分の子であるから自分としては寔に悲しい事であるけれ共、今日此処に居る人にとつては何等の關係もない、赤の他人である、其人達から見るとつまらぬ子供であるといふ辺に遠慮して、自分の悲みを人に嫁するのを避けて居るのであらう、併し人情は人情であるから顔はニコニコしても胸の悲しみは押へられず、自然にあの両手に顕はれたのだ、日本婦人は極めて状にこまやかであるが、外国人と風俗習慣を異にする処からあゝいふ鳥渡見ては可笑しい様なニコニコをする事があるのだと、妻が大いに日本通を振廻した事があつたが、この笑を隠すといふ氣風は女ばかりではない、男にもある事で、昔から一体にニコニコといふことには冷淡な傾きがあつたが、今日では時代も異つて来て居れば、日本人の風俗習慣も異つて来て居るし、國際的關係も違つて来て居るのであるから、日本人もニコニコという事に就いて大いに考へて見る必要があらうと思ふのだ(一〇)

という。ここでは彼の妻だけが顔ではなく、手に持ったハンカチにも目を止め、その意味を彼女なりの解釈で述べている点が、先ほど示した『世渡りの道』とは異なっている。また先ほどは「甲婦人」となっていたのが、新渡戸稲造の妻になっている点も表現が異なる。

ここでは新渡戸の妻が気付き、その解釈をし、「妻が大いに日本通を振廻した」点が強調されている。笑顔の意味についても、日本の婦人のたしなみとされている喜怒哀楽を妄りに外に表さないという理由だけではなく、死んだ自分の子の死という悲しみを人に転嫁させないようしたのだろうという。だが、同じ人間であるから悲しさはどうしても隠せず、それが自然にハンカチを握る両手に表れたのだと述べたとしている。この解釈はラフカディオ・ハーン（小泉八雲：一八五〇～一九〇四年）が「日本人の微笑」という随筆の中で示したものと類似している（二）。

それはともかく、次にこれらの原話になったと思われる話を、芥川の「手巾」と比較してみよう。

五 「手巾」との比較

表1は、『世渡りの道』の記述と、雑誌『ニコニコ』に載った談話、そして「手巾」の違いを記した一覧表である。

表1…比較対照表

項目	『世渡りの道』		雑誌『ニコニコ』	「手巾」
場所	不明		北海道の新渡戸宅	新渡戸宅（東京か？）
時間	不明		北海道農学校に居た頃	日の長い初夏の午後
手巾を持っていた人物	日本婦人		日本の婦人	西山憲一郎の母（西山篤子）
手巾を見た人物	甲婦人（西洋人）		新渡戸稲造の妻（アメリカ人）	東京帝国法科大学教授・長谷川謹造

子の死を語る時の表情	笑っていたが眼には涙がこぼれていた	ニコニコ顔	口角には微笑
非難した人物	乙婦人（西洋人）	欧羅巴人の婦人たち	なし
感心した人物	甲婦人と、新渡戸稲造	新渡戸稲造の妻と、新渡戸稲造	なし
迫り着いた結論	人は決して長く自分を隠し得るものではない	日本人もニコニコということについて大いに考えてみる必要がある	今、読んだ所からうけとつた暗示の中には、先生の湯上りののんびりした心もちを、攪さうとする何物かがある。武士道と、さうしてその型と・・・
背景にある思想	ニコニコ主義	ニコニコ主義	武士道

・場所と時間

この表からわかるように、「手巾」では、『世渡りの道』では示されていない場所と時間が示されている。特に時間が、初夏の話として設定されているのが注目される。岐阜提灯や、朝鮮団扇というのは、それを強調するものかもしれない。通常、岐阜提灯はお盆に用いられることが多いからだ。「手巾」は初夏のそれもお盆の時期の話という設定になる。

他方、雑誌『ニコニコ』では、札幌農学校時代と言うから、本来この話は、一八九一年から遅くとも一八九七年頃の話と思われる。ということはまだ『武士道』（一八九九年アメリカで刊行）を発表する前の話と推察できる。「手巾」が新渡戸稲造をモデルとしていることは先行研究でも明らかにされている。とすれば、「手巾」はこの話の時間を現代へと移行していることになる。作中に表れる当時、非常に流行していたものだからだ。

それに加え、「手巾」が書かれた時、新渡戸は第一高等学校の校長と東京帝国大学農科大学を兼務していた。「手巾」冒頭にある「東京帝国法科大学教授」とあるのも新渡戸をモデルとした「長谷川謹造」を現代の新渡戸の姿を描くための一つの仕掛けかもしれない。

ともあれ、原話と思われる話では、過去の話であったものを、「手巾」は現在のものへと時間を移行させていることがわかる。それまでの芥川作品は説話に由来するものであったから、時代はかなり昔の話として語られた。それに對して、「手巾」はあくまでも現代物として表現しようとする意図がはつきりと見えるのである。

・手巾を持っていた人物

これはいずれも日本の婦人であるが、「手巾」だけには、「西山篤子」という固有名詞が与えられている点が異なる。それに「四十恰好の婦人」という年齢に関する描写もある。さらには、「小さな名刺」を持つている人物である。当時名刺を持つている女性がどのような人なのか、それは当たり前のことだったのかはわからないが、一応指摘しておく。

あと、表には書けなかったが、原話と思われる記述では、新渡戸とこの日本婦人は既知の仲であった。だが「手巾」では、初対面という設定になっている。

・手巾を見た人

ここは子の死を語っている際に、婦人が握りしめていた手巾を誰が見たかを比較してみる。

まず『世渡りの道』では、「甲婦人」が発見している。ここではその手巾がおそらく日本婦人の涙で濡れていた点が注目される。口には微笑みをたたえ、言葉は爽やかではあったが、眼からは涙が溢れ、時折それを手巾で拭いて、絞っていたとしている。そうした一連の仕草を、新渡戸を含む他の同席者は見逃していたように書かれている。

雑誌『ニコニコ』では、新渡戸や同席した欧羅巴の婦人たちが気付かなかった日本婦人の両手に固く握られた手巾を見たのは、新渡戸の妻である。新渡戸は「談話の法へ気を取られて顔ばかり見て居たので手迄は注意しなかったが」と書いている。新渡戸はまったく気付いていなかったのである。日本婦人の手巾を見付けた婦人を「流石は女で」と言うように感心している。

それに対し「手巾」では、長谷川が朝鮮団扇を落とした際にテーブルの下から覗いた時に、偶然気が付いたという

設定になっている。この点も「手巾」による改変と思われる。長谷川自身が直接見る事によって、より大きな衝撃を受けるような設定になっているのだ。「手巾」内ではそれを「発見」としている点も興味深い。

・子の死を語る時の表情

これは少し先にも触れたが、『世渡りの道』では、顔は笑っていたが、眼からは涙が溢れ、手巾はその涙で濡れていたと思われる点が、他の二つと大きく異なる点である。

・非難した人物

『世渡りの道』では、「乙婦人」という西洋人が理解しかねると激しい口調で非難している。それに対し、雑誌『ニコニコ』ではそこに居合わせた西洋人、それも欧羅巴人の婦人二三人が皆「吾々欧羅巴人には了解出来ない」という態度を示したという。「手巾」にはこうした西洋人は出てこない。そもそも物語では長谷部が一人である設定になっているからである。他は西洋人の来客中に起こったことなので、そこに大きな差が見られる。「手巾」は登場人物を極力少なくしている節がある。

・感心した人物

日本婦人の振る舞いに感心した人物は、手巾を見た人物であり、それを教えてもらった新渡戸稲造の二人である。つまり、「手巾」を見た人物や聞いた人物が感心するのである。「手巾」の場合は、「発見」があるだけであり、「感心」はしていない。長谷部はその姿に大いに驚き、戸惑うことになる。この戸惑いがこの箇所以降の「手巾」のもやもやした雰囲気を作り出している。

・辿り着いた結論

結局、それぞれの挿話や談話、小説が辿り着いた結論は、表1に示した通りである。『世渡りの道』では「人は決して長く自分を隠し得るものではない」という事をリンカーンの言葉を引きながら述べていた。雑誌『ニコニコ』では、「日本人もニコニコということについて大いに考えてみる必要がある」という結論に達していた。これらのきつ

かけとなったのが、日本婦人の振る舞いだったのである。いずれも結論は明確だ。

それに対して、「手巾」は「今、読んだ所からうけとつた暗示の中には、先生の湯上りののんびりした心もちを、攪さうとする何物かがある。武士道と、さうしてその型と・・・」とあり、長谷川に何かモヤモヤしたものを残した形になっている。今まで信じて疑わなかった物が崩れてしまう、そんな危機感さえ感じさせる描写になっている。

・背景にある思想

『世渡りの道』には「ニコニコ主義の世渡り」という項目がある。どんな時でも怒らずに気概を持ちながらニコニコして暮らそうというものである。雑誌『ニコニコ』はこの「ニコニコ主義」を鼓吹するために発行されていた雑誌である。したがって、両者の背後には共に「ニコニコ主義」がある。

それに対して「手巾」の方は、明確に「武士道」が長谷部の信条であると記されている。

先生の信ずる所によると、日本の文明は、最近五十年間に、物質的方面では、可成顕著な進歩を示してゐる。が、精神的には、殆、これと云ふ程の進歩も認める事が出来ない。否、寧、或意味では、墮落してゐる。では、現代に於ける思想家の急務として、この墮落を救済する途を講ずるのには、どうしたらいいのであらうか。先生は、これを日本固有の武士道による外はないと論断した。武士道なるものは、決して偏狭なる島国民の道徳を以て、目せらるべきものでない。却てその中には、欧米各国の基督教的精神と、一致すべきものさへある。この武士道によつて、現代日本の思潮に帰趣を知らしめる事が出来るならば、それは、独り日本の精神的文明に貢献する所があるばかりではない。惹いては、欧米各国民と日本国民との相互の理解を容易にすると云ふ利益がある。或は国際間の平和も、これから促進されると云ふ事があるであらう。――先生は、日頃から、この意味に於て、自ら東西両洋の間に横はる橋梁にならうと思つてゐる。(一一)

まさに新渡戸稲造の『武士道』の内容を端的に述べた箇所となっている^(二三)。ただ、大正期には『武士道』だけではなく、「ニコニコ主義」も大きな運動となっていたことをここでは付記しておきたい^(二四)。だからと言って、芥川がこの作品で「ニコニコ主義」を揶揄しているとも思えない。ここでは、やはり長谷川謹造こと、新渡戸稲造という人物、もう少し広げて言えば、何か確固たる主義主張を信じて疑わない人物に対して、芥川は揺さぶりをかけているのかもしれない。あるいは、新渡戸の様に国際派という人々の内実を少しだけ暴露しようとしている可能性もないわけではない。ここではこれ以上の解釈や推測はせず、指摘だけにとどめておく。

おわりに

本稿では芥川龍之介「手巾」の原話となったと思われる記述を二点紹介し、それらを「手巾」と比較してみた。その結果明らかにしたことは以下の通りである。

- ・この話を芥川に教えたという久米正雄や、芥川自身が、今回原話と思われるとした『世渡りの道』や雑誌『ニコニコ』を読んだかどうかは判定できない。ただし、従来一番近いとされてきた『世渡りの道』よりも、雑誌『ニコニコ』の方により詳細な記述があることは明らかだ。
- ・「手巾」では、出来事の時期や時間がわかるような設定になっている。また原話は「手巾」が書かれたおよそ二〇年以上前の話であることが明らかになった。
- ・原話は、西洋人が日本の婦人を見て非難したり、感心したりする話であるが、「手巾」では日本人である長谷部謹造が日本人の姿に戸惑いを覚える作りになっている。
- ・雑誌『ニコニコ』では新渡戸稲造の妻が大きな役割をしているが、「手巾」では物語に登場するものの、それほど大きな役割をしているわけではない。

・「手巾」は何らかの思想を揶揄するというよりは、長谷川に代表されるような人物を揶揄する物語になっていると推察される。

こうした作業がどれほど学術の発展に寄与できるものなのか、筆者には正直わからない。特に文学研究において、本稿はおそらく無視されるだろう。筆者は文化研究、とりわけ雑誌『ニコニコ』の研究者という立場から本稿を執筆したのだが、たいていの場合、そうした努力は他分野から無視される傾向にあるからだ。残念なことだが、それが現実である。

それはともかく、今回は手巾に関するエピソードの原話を探ってみたが、この作品では「ストリントベルク」、すなわち Johan August Strindberg の「作劇術」が鍵になっている。彼がどんな人物か、今後の研究のためにも辞書で確認しておきたい。『日本国語大辞典（第二版）』には次のようにある。

スウェーデンの劇作家、小説家。強烈な個性の持ち主で生涯を通じて恋愛と思想的動揺を繰り返し、一九世紀末のヨーロッパの矛盾と苦悩を追究。イブセンと並ぶ北欧の代表的作家。代表作に、小説「赤い部屋」「痴人の告白」、戯曲「令嬢ジュリー」「ダマスクスへ」「死の舞踏」など。（一八四九～一九二二）（二五）

もう一つ見ておこう。『デジタル大辞泉』の記述である。

[1849～1912] スウェーデンの劇作家・小説家。赤裸々な人間像を描く自然主義的な作品を書いた。イブセンとともに近代演劇の先駆者。小説「赤い部屋」「痴人の告白」、戯曲「父」「令嬢ジュリー」「ダマスクスへ」「死の舞踏」など。（一六）

これらの記述からわかるように、彼はイブセンと並ぶ、近代演劇の先駆者であり、自然主義的な戯曲を多く書いた人物である。この「自然主義」、「近代演劇」から見た新渡戸稲造の思想、ないしはこの「手巾」の日本婦人の振舞いはどう映ったのだろうか。それが気になる。長谷川謹造が感じた違和感は自分の信条とは違うものに出会った時に起こる違和感であり、疑念であろう。あの婦人の振る舞いを素直に受け入れた時には感じなかった違和感を、長谷部は「ストリントベルク」の作劇術を観た際に感じた。そこには、近代以前の歌舞伎を代表とする「型」の演劇（作品では型にこだわる役者、五代目・尾上梅幸が代表とされている）と、自然主義を中心とする近代作劇法の違いが存在する。そんな「過去」と「現在」、つまりは「新旧の対比」が隠されているのではない。本作品では「西洋」と「東洋」の両洋の軸はよく指摘されるが、新旧の対比はあまり指摘されていないようだ（二七）。長谷川はもちろん「新」側の人間として自己認識をしているが、実は「旧」派の人間ではないのか、そんな不安が頭をよぎった瞬間ではなかったか。それは長谷川だけではない。彼が身上としている「武士道」も同じである。「新」のようで実は「旧」。この間で一瞬、揺曳、逡巡する長谷川の姿がこの作品には垣間見られる。その道具立てとなっているのが、「岐阜提灯」であり、「朝鮮団扇」であるのではないか。小説の最後に長谷部を襲う「不安」はこの自らが果して「新」に属するのか、あるいは「旧」に位置する者なのか、といったアイデンティティの揺らぎに起因する「不安」であったのではないだろうか（二八）。

ともあれ、今後も雑誌『ニコニコ』の性質や特徴を明確化する作業を進めていきたいと考えているし、もしそこに何かの原話となるものがあれば積極的に紹介していきたいと考えている。

注

- (一) 関口安義・庄司達也編『芥川龍之介全作品事典』勉誠出版、二〇〇〇年、四五八頁。長沼光彦執筆担当。
- (二) 同前、四五九～四六〇頁。
- (三) 代表的なものに、田島俊郎「芥川龍之介の『手巾』あるいは朝鮮団扇が顕わにするもの」(『言語文化研究』第二四卷、徳島大学総合科学部、二〇一九年)や、謝銀萍「芥川龍之介『手巾』論―岐阜提灯を視座として―」(『芥川龍之介研究』第一三三号、芥川龍之介研究編集委員会、二〇一九年)などがある。
- (四) 代表的なものとして、下野孝文『微笑』と『型』―芥川龍之介『手巾』論―(『研究紀要』第四五号、長崎県立女子短期大学、一九九七年)や、木村素子「芥川龍之介『手巾』論：『型(マニール)・臭味(メツツヘン』という翻訳言語」(『上智大学国文学論集』第五四号、上智大学国文学会、二〇二一年)が挙げられる。
- (五) 久米正雄『二階堂放話』新英社、一九三五年、三一三頁。
- (六) 相川直之「芥川龍之介『手巾』論―新渡戸稲造の影響―」(『近代文学試論』広島大学近代文学研究会、二〇〇二年。相川氏は他に『帰雁の蘆』(弘道館、一九〇七年)の影響についても、稿中で指摘されている。相川氏も記されているように、これらの指摘はそれまでにはなされていなかったようであり、したがってこれらは相川氏による発見であると言える。
- (七) 新渡戸稲造『世渡りの道』実業之日本社、一九二二年、二七九～二八〇頁。
- (八) 新渡戸稲造「日本人のニコニコ振(中)」(ニコニコ倶楽部編『ニコニコ』第二四号、一九一三年二月、一〇頁。
- (九) 同前、一一頁。
- (一〇) 同前、一一～一二頁、
- (一一) ハーンは次のように書いている。

愛する人を亡くしたばかりの人が、私にそう告げるとき、どうして笑い声を立てることができるのか、私は長いこと理解できなかった。しかしこの笑いは、自己を押し殺しても礼節を守ろうとする、ぎりぎりの表現なのである。この笑いが意味しているのは、「あなた様におかれましては、私どもに不幸な出来事が起こったとお思いになりました、どうぞ、お気を煩わせませんようお願いいたします。失礼をも顧みず、このようなことをお伝えいたしますことを、お許しください」という内容なのである。(ラフカディオ・ハーン、池田雅之訳『新編 日本の面影』角川文庫、二〇〇〇年、三一―三二頁)。

また、C・ムンチンガーも同じようなエピソードを残している(C・ムンチンガー、生熊文訳『ドイツ宣教師の見た明治社会』新人物往来社、一九八七年、一〇四頁など)。

(一二) 『全集』二六六―二七七頁。

(一三) 当時の「武士道」ブームについては、竹内里欧『手巾』と『武士道』ブーム―〈擬・普遍〉主義的主体化のメカニズム―『京都社会学年報』第一七号、京都社会学年報編集委員会、二〇〇九年に詳しい。

(一四) 「ニコニコ主義」など当時の動向については、拙稿『笑う写真』の誕生―雑誌『ニコニコ』の役割―『日本研究』第六一号(国際日本文化研究センター、二〇二〇年)を参照されたい。ちなみに「ニコニコ主義」を鼓吹しようとしていたのは、当時不動貯金銀行の頭取をしていた牧野元次郎という人物であった。

(一五) 『日本国語大辞典(第二版)』Japan Knowledge Lib.

(一六) 『デジタル大辞泉』Japan Knowledge Lib.

(一七) 竹内里欧『手巾』と『武士道』ブーム―〈擬・普遍〉主義的主体化のメカニズム―『京都社会学年報』第一七号(京都社会学年報編集委員会、二〇〇九年)には次のような指摘がある。

従来、「手巾」の短編にかんしては、伝統と近代の調和への不安や、帝国主義への批判などということが頻繁に指摘されている。しかし、小説の最後に主人公が陥る不安感が何に「由来」するものか深く追求

（二八）
したものはい少ない。（三八頁）
前掲竹内論文では、この長谷部の「不安」は、「擬—普遍」主義的主体化」に起因するものだとしている。

The Origine of the“Hankachi” written by Ryunosuke Akutagawa

IWAI Shigeki

Ryunosuke Akutagawa's "Hankechi" is a work published in the magazine "Chuo-koron" in 1916. Various things have been said about this work, some of which discuss its influence with Inazo Nitobe. In this article, I pointed out that Nitobe Inazo's discourse, which was thought to be the original story, was published in the magazine "Nico-Nico", and then carefully compare how "Hankechi" differs from the original story. Through this kind of work, I would like to shed some light on the creative methods of Akutagawa's early works, and at the same time consider the themes that Akutagawa wanted to express in "Hankechi". This is not only a part of Akutagawa's research, but also a study of the magazine "Nico-Nico" which has been the subject of my research for many years.

Keywords; The magazine "Nico-Nico", Ryunosuke Akutagawa, "Hankechi", Inazo Nitobe, The magazine "Chuo-koron"